

良い授業とは何か

海外の大学からこのキャンパス(慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス、SFC)へ着任して、もはや一年近くになる。SFCが創設されてから四年も経った時点でその教員の一員として加わる場合には、全力走行している特急列車にいわば途中から飛び乗ったような気持ちにならざるを得ない。

こうした新参者にとっての最大の課題は、何はともあれ担当科目について先ず良い授業をすることである。事実、この一年、毎週講義ノートを新しく作成するのに全く手一杯であった(その帰結として研究活動は開店休業の状態であった)。だが、お蔭様で受講学生による授業評価では総じて好意的な反応を貰い、またオフィスアワーにやって来る学生からも、授業の進め方について勇気づけられるコメントを直接的に貰うこともある。やっと無事に一年終わったというのが現在の率直な感想である。

学生の授業評価と授業担当者の悩み

国内の大学においてはこれまで授業を担当する経験がなかったため、自分の授業においては、取りあえず海外(米国およびオーストラリア)の大学で教壇に立った経験に基づき、そこで比較的馴染んだ方針を基礎にしてやってみることにした。つまり、講義では、常にまず論点を明確にし、また諸概念を出来るだけクリアーに説明するとともに、SFCらしい新しい視点をも工夫しつつ体系的にまとめるというスタンスで臨んだわけだ。それが、幸い学生諸君にも評価されたと受け取り、またそのことを最近まで素直に喜んでいた。

しかし、こうした一見そこそこの評価を得ているようにみえる自分の授業に対し、最近になってやや疑問を感じ、また悩みを抱いている。それは、授業評価において担当者が「良い成績」(学生から見た場合の良い評価)を収めることが、果たしてSFCでの教育方針に完全に沿った授業をしていることになるのかどうかという問題である。

きれいに整理された、要領のよい、そして分かり易い講義は、確かに学生の側からみれば、スプーンで食事を口先まで運んで食べさせてもらっているようなものであり、このため学生による授業評価は良いものとなる可能性が大きいのではないかと。つまり、学生から見れば受動的な取組みでも知識を効率良く身に付けることが出来ることになるので、高く評価される可能性が大きいのではないかと。しかし、そうした授業は、まさにSFCが決別した伝統的な教育方法(知識伝授型の授業)に他ならないのではないかと。

これまでの自分の担当授業では、学生にとって単位取得負担が極端に大きい「エグイ」ものとはしなかったが、かといって「楽勝科目」にすることも当然回避した。然るべきレポート課題等も課し、学生の成績評価も相当厳しいことを事前に承知させた。だから、単位の取り易さが前記の授業評価の原因ではなかったとは思ふ。

しかし、授業のスタイルをもっと思考援助型にすべきではなかったろうか、また学生に自分の手を使って何かをさせるという色彩をもっと強めるべきではなかったろうか、などの点をいま反省している。基本的な論点を講義で解説したあとは、むしろ学生をそこで突き放し、あとは自分で考えさせる、やらせるという授業のやり方にもっ

と傾斜させるべきではなかったか、そしてSFCではそうした授業をこそ行なうべきではないか、との思いを近頃強めている（何だ、今ごろになってやっと気づいたのかといわれそうだが）。

ほんとうに良い授業とは

授業のやりかたをそのようにした場合のひとつの問題は、学生による授業評価は低下するようにも思えるのだが、その点をどう考えるべきなのか。それとも、ほんとうに学生が学ぶことが多ければ、やはり高く評価されるのだろうか。その答えは自分には、まだわからない。いずれにせよ、ひとつの授業は両者を上手くバランスさせて組み立てることが大切ということに間違いはあるまい。同僚の諸氏と話しても、授業に関してはオーディオ・ビジュアル機器の活用をはじめ、グループ・ワークの導入、ディベート（討論）方式の活用、頻繁な小テスト実施、大学外の専門家を招いての討議など、それぞれ良く工夫を凝らしておられ、参考になることが多い。さすが、SFCである。

自分も今、新年度は昨年よりも良い授業にすべく、新しい授業シラバスの作成に頭を悩ませているところである。

（慶應義塾大学SFCニュースレター「パンテオン」第五巻第三号、一九九五年三月）